

近代日本画家横山大観の上野池之端邸（住宅画室）庭園の特徴に関する考察

A Study on Characteristics of Modern Japanese-style Painter Yokoyama Taikan's Residence-atelier Garden at Ueno Ikenohata

天野 公太郎* 松本 恵樹** 國井 洋一*** 鈴木 誠***

Kotaro AMANO Yoshiki MATSUMOTO Yoichi KUNII Makoto SUZUKI

Abstract:Yokoyama Taikan Memorial Hall was used as a residence-atelier during 1909-1945 and 1953-1958 by Taikan Yokoyama (1868-1958) who was a representative of modern Japanese-style painter. There is a characteristic garden in the former Taikan Yokoyama residence. In 1909, Taikan built a residence-atelier at Ueno Ikenohata on the banks of Sinobazunoike where was a famous cultural and scenic place of Tokyo. However, unfortunately the residence-atelier had destroyed by an air raid on Tokyo in 1945 and the garden had damaged also. After that, Taikan's residence-atelier was rebuilt and his garden was restored by his strong intention. We had on-site surveying the garden, considering Taikan's career, analyzing relationships between his representational paintings and the garden features, and interviewing to Mr. Jiro Fujii who was involved in the restoration of the garden. In the result, we found that Taikan ordered to plant the trees and shrubs in the garden, just like he painted on his pictures. The garden was landscaped to have more spiritual meaning than natural landscaped garden by his intention. This attitude toward to the garden was different from the gardens created by the other representative of modern Japanese-style painters.

Keywords: Taikan YOKOYAMA, residence-atelier garden, Japanese-style painter, modern Japanese garden, Ueno Ikenohata

キーワード: 横山大観, 住宅画室庭園, 日本画家, 近代日本庭園, 上野池之端

1. はじめに

明治・大正・昭和時代初期にかけては日本画の隆盛期といえる時代であり、全国で数多くの画家たちが活躍した。それと同時に画家たちは当時の資産家や地主といったパトロンとなる有産階級や、文化に精通し教養ある文士や他の芸術家との交流を深めるとともに、経済的に裕福となり、それぞれがアトリエを設けた住宅を営んだ。京都画壇を代表する画家である竹内栖鳳（1864-1942）は東山山麓の高台寺に本宅を、嵐山をのぞむ嵯峨の地に別宅・霞中庵を営み、栖鳳の弟子であった橋本関雪（1883-1945）は白沙村荘を開いた。そして、これらの住宅には庭園も造られ、作庭にあたって画家たちが自ら指揮監督したことが知られている¹⁾。

横山大観記念館（東京都台東区池之端）は、近代を代表する日本画家、横山大観（1868-1958）が明治42年から昭和33年（1909-1958）の間に住宅画室とした場所である。この旧横山大観邸には特徴のある庭園が現存する。明治42年（1909）、大観は当時、東京の著名な景勝地であった不忍池のほとりである池之端に住宅画室を営んだ。しかし不幸なことに、この住宅は昭和20年（1945）の東京大空襲により焼失し、その庭園は損傷した。その後昭和29年（1954）、大観の強い意向により住宅はかつて同様に再建され庭園も修復された。本研究では、横山大観がこだわりを持ったこの庭園の特徴を明らかにすることにした。

研究方法としては、庭園の実測調査、横山大観の経歴・絵画作品と彼の庭園との関係分析、そして庭園の修復に関わった藤井二郎氏と横山大観の孫であり横山大観記念館館長である横山隆氏へのヒアリング調査を行った。これをふまえて、近代日本画家横山大観の住宅画室としての庭園の特徴と、池之端に立地した場所の意味について考察を加えた。

2. 近代日本画家の庭園に関する既往研究

横山大観本人やその作品に関する研究は存在するが庭園に関する研究は特に見当たらなかった。ただし、大観の描いた花鳥画や

風景画の分析や研究は、彼の自然観や興味の対象を知る上で貴重な資料である。

庭に関連した既往研究として小野（2000）は京都の著名な日本画家、神坂雪佳、竹内栖鳳、山本春挙、橋本関雪の庭園を考察しており、それぞれの庭園の概要や変遷、デザインや特徴、画家との関係や画家の美意識が庭園に与えた影響を具体的に体系的に整理した。そこから、画家たちが作庭に積極的に関わり、庭師にとって庭園意匠の相談相手という立場で自身の美意識や趣向を庭園のデザインに表現し、大きく影響を与えたことを指摘している²⁾。

また、吉田（2009）は近代日本画家・川合玉堂の旧別邸二松庵庭園について研究し、玉堂の自然観や、画家・作庭者との関係から庭園の特徴を分析している。そして、二松庵庭園の位置づけは京都の画家たちと同様に、自然風景要素が実物大に写實的に表現され、園外景観を借景した自然主義風景式庭園の範疇にあると結論付けている³⁾。

本研究では既往研究で述べられたように、横山大観の庭園にも同時代に活躍した日本画家たち同様に、自身の美意識が庭園のデザインに表現されていると考えた。その一方で、大観は絵画では写實的な表現を行わず、精神性、抽象性を重視する感性をもっており、その庭園には、写實的な表現をする自然主義風景式庭園との違いはないか考察した。

3. 研究方法

(1) 文献調査

横山大観の経歴やその作品概要、旧横山大観邸庭園のある池之端の歴史、庭園の作庭経緯を知るために文献調査を行った。また庭園内には、サクラ、ウメ、イロハカエデなど大観が好み、画材として多く描いた⁴⁾植物が植えられており、それらを題材とした大観の花鳥画・風景画の特徴について考察した。

(2) ヒアリング調査

横山大観の人物把握や自然観と庭園との関係を把握し、庭園の

*東京農業大学大学院農学研究所造園学専攻

**春秋設計工房近代庭園研究室

***東京農業大学地域環境科学部造園科学科

修復当時の状況や大観本人の生活ぶりを知るために、関係者へのヒアリング調査を実施した。調査は2013年7月23日に庭園修復時に岩城造園に所属していた藤井二郎氏、2013年11月16日に大観の孫で横山大観記念館館長である横山隆氏に対して行った。

(3) 現地調査

旧横山大観邸庭園の現況を知るために庭園を3Dデータ測量をもとにして実測し平面図を作成した。(図-1) また、庭園内の植栽を調査し、現況の植生を記載した。

2013年12月19日に実測した平面図をもとに藤井二郎氏、横山隆氏と共に庭園内を踏査し、ヒアリング調査で得た表-1の内容を現地で確認した。

4. 調査結果

(1) 旧横山大観邸の位置する池之端の近代

旧横山大観邸が営まれた東京都台東区池之端は当時、下谷区茅町となっており、不忍池の西側の池岸に位置している。元々は明治時代に日本郵船の専務を勤めた浅田正文(1854-1912)の邸宅があり、大正元年(1912)の地籍台帳によれば下谷区茅町二丁目15~18までの地主は浅田正文であり、19は圓城とくという人物のものであった⁷⁾。昭和10年(1935)の台帳では浅田と圓城の名義はなく二丁目18は分割され二丁目18-2と19は横山秀麿(横山大観)の名義となっている⁸⁾。それ以前については、明治時代のジャーナリスト・政治家である福地源一郎の邸宅で、池之端御殿と呼ばれた茶室を設けた豪邸があり、破産しその豪邸を維持できなくなった福地から浅田が買い取ったと思われるが、それを示す文献は現在見当たらない。しかし福地の池之端御殿が下谷区茅町16に存在し⁷⁾、福地と浅田はともに茶を好み益田孝(三井財閥の実業家、茶人)が開いた茶会で交流がある⁸⁾ため十分に考えられる。

(2) 旧横山大観邸の変遷

大観は、明治39年(1906)日本美術院が茨城県五浦に移転した際はその傍に住宅を設けた。しかし明治41年(1908)に焼失したことを契機に、池之端に仮住まいを求め、現在と同じ場所下谷区池之端茅町二丁目十九番地に住居を新築したのは翌明治42年(1909)のことである⁹⁾。池之端はかつて家族と暮らしていた下谷区谷中初音町の日本美術院舎宅に近く、対岸には日本美術学校があるなど大観にとっては非常になじみの深い場所であった。

大正8年(1919)には隣家を買取り、土地を広げて新築した邸宅は、木造瓦葺の数寄屋建築で庭園には竹林と池を設けた¹⁰⁾が、大正12年~15年(1923~1926)にかけて関東大震災に伴う自宅の修復に伴い、庭園を拡張した。その際、大観が五浦に住んでいた時、月がかかることで美しく見えたのを好んだマツ¹¹⁾や、植えた後も自分と同じで年寄りだと喜んで観察していたウメ¹²⁾などを植えて、大観の好みを取り入れるように手が加えられている。

表-1 藤井二郎氏へのヒアリング調査からえられた横山大観の庭園に関する指示

横山大観によ昭28年(1953)の庭園修復の際に出された庭園の植栽地割に関する指示
自身が好み画材となる、オオシマザクラ、ウメ、マツなどの植物の形態(大きさや樹形)を自らスケッチしたものを庭師たちに見せてスケッチと同じ形の植物を持ってくるように指示を出した。オオシマザクラは巨大で荒々しいものを選んだ。ウメは年老いたものをスケッチし、マツは人の大きさの樹高で松林にするようにした。
庭の植栽の配置を指示した。オオシマザクラ中央において観賞できるようにした。植物はすべて葉や枝付きの良いほうを画室に向けて配置するようにした。
庭園内の滝石組みの上にはヤマブキを植えてしだけけるようにした。
庭の裸地には苔を張るのではなく、イワハダと呼ばれる山林の地面を覆う植物を剥いてきたものを置いてなじませるようにした。
客室から画室を見られないようにクロモジの生垣を置いた。デザインはスケッチを庭師に渡して指示をした。出来上がったものを気に入らず自身の手でクロモジの枝の隙間を広げて、そこからサザンカの枝葉が飛び出すようにした。
樹木は剪定することを禁止し、伸び放題にして自然樹形にするようにした。剪定を禁止したことでマツやウメなど一部の樹木は枯れてしまったが、そのたびに新しい樹木を持ってきて植えるように指示した。
鉦鼓洞と呼ばれる客室前に菖蒲畑をつくり画材とした。
庭園南側に新しく滝石組みを作り、客間及び一階の画室から観賞できるようにした。庭の中央に池を作り、画室に自然光を取り入れられるようにした。

昭和20年(1945)の東京大空襲により邸宅は基礎と土蔵を残して焼失し、庭園も池の護岸や滝石組みなどの地割、一部の樹木を除いて被災した。このとき大観は、世田谷区岡本町の小坂順造宅(現、旧小坂家住宅)の離れに避難していた。その後は熱海伊豆山の別荘へと疎開して10年ほど暮らす。昭和29年(1954)に別荘を引き払い、上野池之端の元の場所に自宅と庭園を再建し移り住んだ。その4年後の昭和33年(1958)大観は亡くなるが、最後に池之端の地に移り住み住宅・庭園を再建し、修復したことからこの場所を愛していたことがうかがえる。

(3) 旧横山大観邸庭園の現況と大観の庭園に関する指示の確認

旧横山大観邸は東側に不忍通りに面した敷地を持ち、庭園部分は図-1のように、東側に表門から中門までの前庭と、中門から玄閣までの玄関庭、高さ4mほどの塀に隔たれ、表門から見る事ができない南側の主庭、邸宅の東側にある坪庭に分けられる。

これらの庭園の現況をヒアリング調査結果及び作品概要調査結果(表-1)の内容を確認しつつ分析した。まず、前庭には表門から入るとその正面には塀を背景に大きなざれ石が据えられており、この石は戦前からのものである。そして、すぐに大きく右に曲がる園路と、玄関と玄関庭を隠すように中門があり、園路は丸い自然石の平らな部分をそろえて、目地を均一にした延段であり、岩城造園の得意とする手法で藤井氏が一人で何日もかけて仕上げたという。植栽は、イロハカエデ、ウメなど大観の好む樹木の他、ヤマモモ、サザンカ、ウバメガシで少し暗くうっそうとしており、大小様々な景石が配され山居を訪れたような雰囲気を持つ。

次に中門をくぐると居宅玄関と一体化した、前庭とは隔離された玄関庭となっている。イロハカエデ、ウメなど大観の好む落葉樹木を中心に植栽され、前庭と比べ明るい印象を受ける。玄関には土間がなく、外に据えられた沓脱石で、直接に式台にあがるようになっている。これにより玄関と玄関庭との境をなくし一体的に感じさせている。山居のような前庭を外と考えると、あかるい空間の玄関庭は、すでに玄関の内と考えることもできる。

坪庭には小ぶりの四角形石灯籠が置かれている。かつてハチクが植えられており、大観は「夜」(1922)という作品で自宅のタケにとまったミミズクを描いている¹³⁾。しかし、日照条件などの生育状況の悪さからはハチクは枯れ現在はカリンが植えられている。

最後に、大観が庭園デザインに大きく関与した主庭は、彼の指示で植えられたオオシマザクラやイロハカエデやウメが図-1の鉦鼓洞(客室)や大観が庭を眺めた画室からほど近い場所にあり、よく観賞することが出来る。ネズモチやモッコク、スダジイなどの常緑樹で敷地の境目や壁際を植栽しており隣の建物を隠している。かつて存在したと語られた人の背丈ほどの樹高で100本ほど植えられた赤松林は庭の南東に、菖蒲田は鉦鼓洞近くの南側に広がっていたというが既に無い。大観が存命時に、アカマツの剪定を禁止したことや、元々日陰地である生育環境の悪さなどにより枯れ、ショウブは画材として必要がなくなり、管理更新する人の不在が消失の理由と考えられる。

そのほかにも画室に光を取り入れるために建物近く、東から西へ庭の中央につくられた池が特徴的である。またその池に注ぐ、南側につくられた滝石組みと流れの水みちは、画室からの観賞も視野に入れていたが、現在は滝・流れを循環する水流用ポンプの老朽化から止水している。ヤマブキは変わらず庭中央付近の石組みにかかり花を咲かせている。“ヤマハダ”と呼ばれた山林下床の地被植物をはいだものは根付かなかったのか、今は見られず庭園はコケに覆われている。また、かつて鉦鼓洞からの画室への視線を遮る目的で、大観がつくらせたという大きめのクロモジによる袖垣は既に無い。このように大観指示による庭園デザインのいくつかは失われたが、水流が止まり、建物(画室、客間)に近接している池部分が狭められた¹⁴⁾以外に地割に大きな変化はなく、大

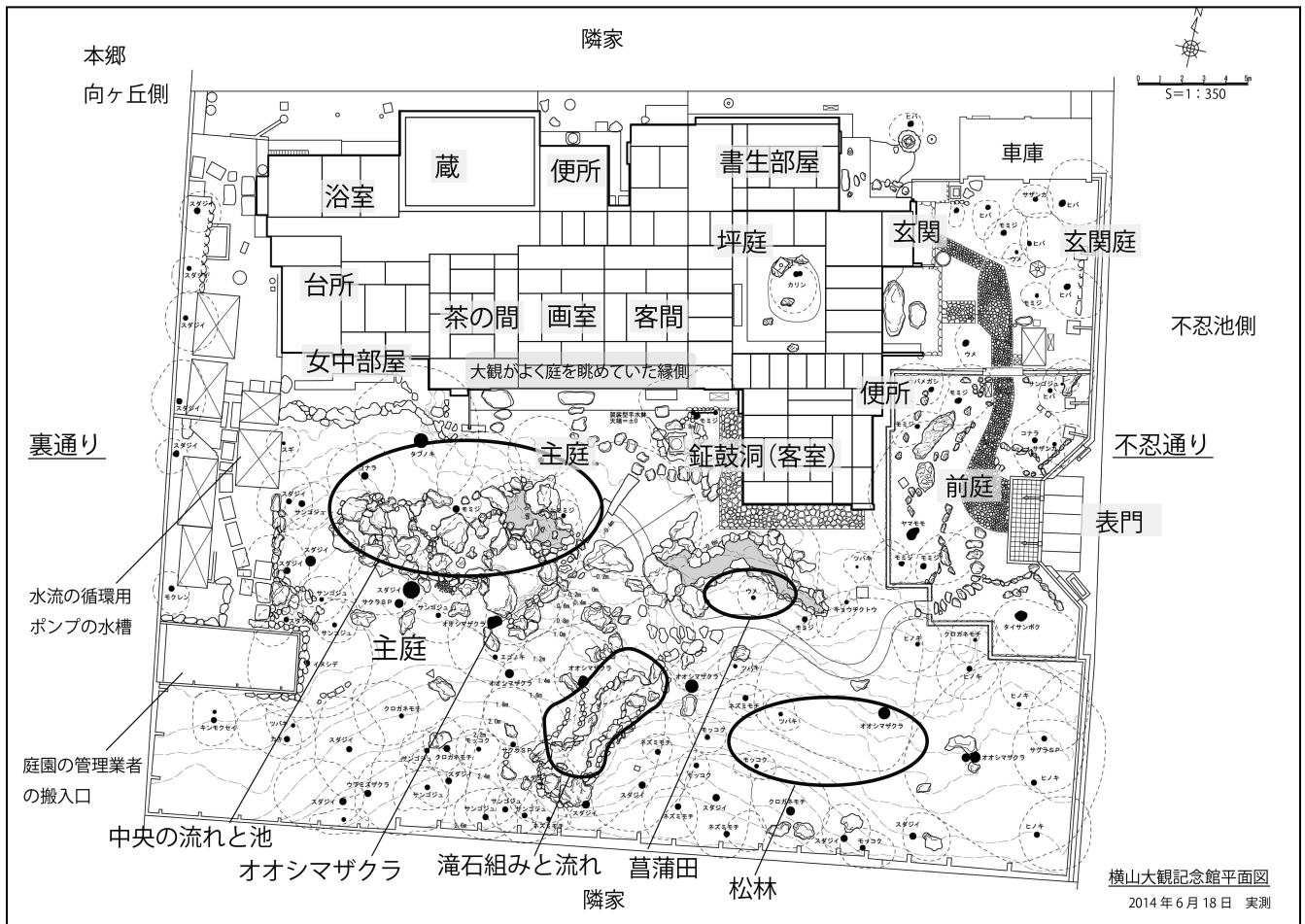


図-1 旧横山大観邸母屋および庭園の現況平面図¹⁵⁾

大きく育ったオオシマザクラやウメなどの植栽が大観の絵画世界を表現しつづけ、自然光を取り入れるための池などの創作活動をサポートするための庭園デザインはその名残をのこし、近代日本画家の住宅画室庭園としての特徴を今に感じ取ることができる。

(4) 横山大観の描いた植物の特徴

大観は、花鳥画や風景画では好んでサクラ、マツ、ウメ、を描いた。一般的な花鳥画や風景画は技巧のあるいは色彩的な美しさばかりを表現し、自然から切り取られたものであるのに対し、難波(1954)は、「大観の植物が、大自然の気を帯びた、精神美の象徴である。」と評している¹⁶⁾。その理由として、大観の「自然を観て、それをすぐにもにすということとは難しい。頭に一杯しまっておいて、何年か経って、自然の悪い所は皆消えて、いい印象ばかりが頭に残る。その頭に残ったものを絵にすれば、前に観た自然とは違うが、画家の個性はハッキリと出る。」¹⁷⁾という言葉を残し、大観のスケッチに対しては「写生は自然の真髄を理解する法であり、制作の重要な基礎条件の一つであり、大いに必要であることは言うまでもないが、日本画における写生は、単なる写形でなく、写意であって、事物の本然的な生命を感得し、そのものの精神性格を把握し、物神二面の完全を期すべきである。」¹⁸⁾というような発言をしていることが挙げられる。スケッチを生徒多く描き、スケッチに対し並々ならぬ信念を持っていた大観だが、スケッチをそのまま絵にするということではなく、実際に自分の目で見た自然を一度頭の中にしまい込み、その中から心に残った自然の美しい姿だけを描いたと考えられる。

池田(2006)は「大観の花鳥画の分析で、植物の形態は園芸品種はほとんどなく野生種である。」と指摘し、荒々しいヤマザクラやウメなど自然に自生する力強いものばかりであるという¹⁹⁾。

また、彼の描いた植物に共通した特徴として花や枝や葉は重なり合わず、すべて表を向いていることがある²⁰⁾。「秋色」(1917)や「夜桜」(1929)、「紅葉」(1931)など花鳥画の代表作はみな葉や花の表面が描かれており、重なりはほとんど描かれていない。

(5) 横山大観の絵画作品と庭園との関係

藤井二郎氏によれば横山大観は、庭園の修復に当たり様々な指示を出し、庭園デザインに大きく関与し、横山隆氏によれば大観は画家を志す前は、建築家を目指しており画家にならなければ建築家になっていたという。また、旧横山大観邸は大観自身の設計から建築されていることから建築に対する関心がうかがえる。その絵画作品「千ノ與四郎」(1918)は千利休と茶庭が画題だが、桂離宮や大徳寺など京都の著名な茶庭に取材し、俯瞰の構図で茶庭や庭木の生い茂る様子などを描き、細かな部分まで精緻に描写している²¹⁾ことから建築同様、庭園にも高い関心をもってたと推察される。

表-1の藤井二郎氏から得られた大観の庭園づくりに対する指示した内容で、その絵画作品と大きく関係があると思われるのは、庭園内に自身が好んだ植物(オオシマザクラやウメなど)については自らスケッチしたものを庭師たちに見せて、スケッチと同じ形態の植物を持ってくるように指示を出したことや、植物の葉や枝の表面を画室に向けて配置したことが挙げられる。これは大観の絵画の中の植物の特徴である葉や枝付きの良い表側をむける構図と同じである。他にもヤマブキを石組の上に植えて枝垂れかける構図は「あまご」(1943)、画室や邸宅から離れて配された松林は、生涯多く描いた富士山や海の絵画に共通して登場する松林と同様であり、これらのように庭園の構成と絵画の中の植物の構図には類似点が多く見つかるため、大観は自身の絵画世界を庭園内にも表現しようとしたと考察される。また、画材として観賞利

用するために植物を剪定、配置したり、画室への採光を意識して袋状の池を庭の中心に置くなど、庭園の地割や材料は大観の画家としての制作環境を整えるために大いに影響を受けていた。大観は日本画の制作で非常に重視したスケッチにおいて、写生するものが持つ背景や精神性を強く意識した。これは写実主義とは正反対であり、その感性は庭園にも表れている。それは自然風景を、一般的な庭園では写実的な手法である仕立てられた植物やコケで表すのに対し、植物の剪定を禁止して伸び放題にしたり、“ヤマハダ”（山林の地被植物を剥いできたもの）で庭園内を覆うことで、象徴的あるいは精神的に表現したことが挙げられよう。

5. 大観邸が立地した池之端の意味

横山大観は戦災で住居を失い、熱海伊豆山の別荘に生活していたが、再び池之端に住宅を旧来どおりに再建し、庭園を修復した。土地に固有な庭園の意味を考えたとき、池之端という場所への大観のこだわりの意味の考究は、この庭園の特徴を再考するに重要と考え、この場の歴史、景観、横山大観との関係に関して考察した。

(1) 大観が好み活動の中心とした池之端

東京都台東区池之端は明治時代、下谷区茅町と呼ばれていた。不忍池の西側に位置し茅の茂る地という意味の町名で、本郷向ヶ岡の丘阜を背にし、東に面して不忍池と弁天堂を望み、上野の東叡山全景とを見渡す景勝の地であった。不忍池周辺は明治から昭和にかけて多くの文士や芸術家が住居を構えた文化的に優れた土地であった²²⁾。また日本美術院や、東京美術学校（現東京藝大）にも近く、学生時代、東京美術学校助教授時代と不忍池周辺を活動の中心にしてきた大観にとっては非常になじみの深い場所でもあった。大観は大正11年（1922）東京、琅玕堂にて開かれた「東京名所古跡横断展」という画家たちが自身の好きな東京の名所を選んで描き出品する展覧会に、不忍池を描いた作品を出展している。大観がいつか不忍池を好み、池之端の地を気に入っていたかがわかる。

大観は邸宅を戦災で失い熱海伊豆山の別荘に落ち着くが、以前と変わらず、むしろ積極的に制作活動に取り組んだ。大観は戦時中、金銭面で軍部への援助を厭わなかったが、戦後は復興への援助を惜しまずに行った²³⁾。昭和21年（1946）には再興美術院展も主導で行うなど、芸術文化の復興でも大いに活躍したのである。忙しく東京と熱海を行き来することになり、足を悪くした晩年の大観にとっては辛く、住み慣れた池之端を終の棲家として選んだのには、腰を据えて制作活動に打ち込むための、快適な制作環境づくりといった理由もあると考えられる。

(2) 水戸藩士の家系をもつ大観にとっての池之端

横山大観は茨城県に生まれ、祖父・父共に水戸藩士であった。勤王派であった父・捨彦、思想家としても著名であり国粹主義者とも称された師・岡倉天心の影響を色濃く受けた大観は、自身も国粹主義的な面を持ち、「正気放光」（1944）と題された富士の他、生涯にたくさんの日本の象徴である富士山にちなんだ作品を描いている。この「正気放光」は幕末の水戸学の代表者・藤田東湖の「正気之歌」に、日本人の正気が集まり富士山となり、時代により衰退しようともそのたびに光を放つと詠われたことに題をとっている²⁴⁾。このことから、大観は幼いころより水戸学の気質の中で育ち、多大な影響を受けていると考えられる²⁵⁾。旧横山大観邸がある池之端の北西には、水戸藩の屋敷である駒込邸が位置した。原（2010）は、水戸藩駒込邸庭園は、水戸偕楽園が千波湖を中国の神聖な湖である西湖にたとえ、千波湖を含む景観を縮景しているのと同様に、不忍池を小西湖（小さな西湖）として縮景しているとした²⁶⁾。駒込邸の水戸藩士にとって、不忍池は思想的にも空間的にも非常に重要な場所であったことがうかがえる。また、

江戸時代幕末には水戸藩の藩政に大きく影響を与えた梁川星巖や小野湖山らも池之端で学んでいることから²⁷⁾、この地が大観にとって風致美観的な意味以上に、思想信条的にも意味をもつ場所であったと推察される。

6. まとめ

旧横山大観邸庭園は大観自身が庭園内の主要な植物の種類や配置を決め、サクラやウメ、アカマツは自らスケッチしたものを庭師に見せて注文をだした。また、庭園奥の滝石組みや流れ、建物に沿った中央の池などの地割が大観の指示によってつくられ、石組みの上にヤマブキを植えるなど絵画の構図と同様に庭園の構成がなされている場所があり、自身の絵画世界を積極的に表現しようとしていると考えられる。庭園内の植物は画材として利用するものであり、中央の池や流れはアトリエへ自然光を取り入れるためのものであり、大観の創作環境を整える役割を持ち、庭園の地割や植栽に近代日本画家横山大観の影響を大きく受けたものであった。

大観は絵画制作で大切にしていたスケッチで、対象の精神性を強く重視する感性を庭園づくりに取り入れ、剪定を禁止し自然樹形になるようにした植物や“ヤマハダ”により庭園の自然風景を象徴的に表現することなどに、同時代に活躍した日本画家たちの庭園に共通する、写実的に実物大に自然風景を表現する自然主義風景式庭園との違いが見られた。また、園外景観を庭園内に借景していないことも違いとして挙げられる。不忍池は幕末から昭和にかけて多くの文士や芸術家が移り住んだ文化的にすぐれた場所で、横山大観のルーツである水戸藩との関係が深く、彼にとって信条的、思想的に非常に重要な場所でありながらも、不忍池の景色を庭園内に借景して、直接眺めることはしなかった。これは、横山大観が絵画制作と同様に不忍池の持つ精神性や象徴性を重視していたのではないかと考えられるが、その考察は今後の課題である。

謝辞：横山大観記念館館長である横山隆氏、庭園の修復に携わった藤井二郎氏には多大なご支援いただき感謝を申しあげます。

補注及び引用文献

- 1) 小野健吉(2000):京都を中心とした近代日本庭園の研究:奈良国立文化財研究所, 81-120
- 2) 前掲書1) 81-120
- 3) 吉田博宣(2009):画家川合玉堂の庭園観と旧別邸二松庵庭園:日本造園学会誌ランドスケープ研究 72(5), 447-450
- 4) 難波専太郎(1954):横山大観:美術家出版社, 58
- 5) 高橋尚(1989):地籍台帳・地籍地図(東京)第7巻:地図資料編纂会, 213
- 6) 船橋台(2011):東京地籍図 第6回図本 台東区編:不二出版, 403
- 7) 興津要(1997):明治新聞事始め「文明開化」のジャーナリズム:大修館書店, 37
- 8) 齋藤 康彦(2008):近代教養者の大寄茶会と社会文化事業:山梨大学教育人間科学部紀要 10,301
- 9) 横山大観(1999):横山大観「大観画談」:日本図書センター, 169
- 10) 横山隆氏談(2013年7月23日にヒアリング 以下同様)
- 11) 前掲書4) 154
- 12) 横山隆氏談
- 13) 横山隆氏談
- 14) 横山隆氏談
- 15) 庭園図は自身の測量によるもの、建築図は1976年に(株)建文によって作成された横山大観記念館より提供されたものを使用
- 16) 前掲書4), 45
- 17) 富山県水墨美術館(2001):足立美術館所蔵横山大観展:足立美術館学芸部, 131
- 18) 前掲書4), 19
- 19) 湯原公浩(2006):気魄の人 横山大観:平凡社, 94
- 20) 前掲書4), 141-142
- 21) 浅田彦一(1918):時局の印象:太陽 第24巻 第12号, 28-32
- 22) 永井荷風(2012):上野:青空文庫, 4
- 23) 前掲書4), 130-131
- 24) 吉沢忠:日本近代絵画全集15 横山大観:講談社, 53
- 25) 芳賀登(1996):近代水戸学研究史:冬至書房, 418
- 26) 原祐一(2010):水戸藩駒込邸の研究-藩邸内外の景観と造園の検討:東京大学史紀要(28), 46
- 27) 前掲書4), 94